

会 議 録

会議名	平成 24 年度第 1 回 八王子市市史編さん審議会	
日 時	平成 24 年 8 月 17 日 (金) 午後 1 時 30 分 ~ 午後 3 時 30 分	
場 所	八王子駅南口総合事務所会議室	
出席者氏名	委員	松尾正人会長、相原悦夫副会長、池上裕子委員、内田純功委員、小此木正貴委員、沼謙吉委員、平塚美臣委員、前田成東委員、光石知恵子委員、渡邊秀雄委員、
	理事者	
	説明者	木内基容子市史編さん室長、齋藤和仁市史編さん室主幹
	事務局	(説明者のほか) 佐藤広市史編さん室専門管理官、秋山和英市史編さん室主査、尾崎佐智子市史編さん室主任
欠席者氏名		
議 題	1 . 平成23年度事業実績及び24年度事業実施予定について 2 . 平成 23 年度刊行物についての意見交換 3 . 市政モニターへの設問項目について 4 . その他	
公開・非公開の別	公開	
傍聴人の数	なし	
配付資料名	1 . 資料 1 平成 24 年度市史編さん事業の組織体制 2 . 資料 2 刊行物販売実績・無料配付先・掲載記事一覧 3 . 資料 3 平成 24 年度編集・刊行スケジュール 4 . 資料 4 「資料編 1 原始・古代」及び「資料編 3 近世 1」の章立て・目次案 5 . 資料 5 市政モニターへの設問の基本的考え方及び設問項目 6 . 資料 6 「広報はちおうじ 8 月 1 日号」における特集記事 7 . " 市史編さん職員研修の開催結果 8 . " 刊行物読者アンケートはがきの作成 9 . " 調査等協力者に対するお礼の品の作成 10 . " 市民講座の開催 11 . " いちょう塾への講座提供 12 . " 学生ボランティアの活用・インターンシップの受入	

会議の内容

1. 開会

【松尾会長】今期第4回、今年度最初の審議会を開会する。

まず、出席委員は10名全員で、審議会は成立している。

傍聴者は今のところはいないが、今後來た折には入っていただくということでよいか。

(はい)

次に会議録だが、五十音順で、今回は内田委員にお願いする。

最初に、室長からあいさつをいただく。

【木内室長】立秋が過ぎたのに連日猛暑の中、全員に出席いただきありがとうございます。

前回の会議から9か月空いてしまったが、その際は新八王子市史の刊行計画の一部変更、また、事務局体制に配慮した答申をいただいたおかげで、去年12月に刊行計画を正式に一部変更し、今年度は編さん室の体制も強化できた。23年度に予定していた刊行物も、近世部会からは「村明細帳集成」、民俗部会からは民俗調査報告書第1集の「八王子市西部地域 恩方の民俗」、それから本編8巻、資料編6巻の全14巻の第1巻目ということで、「新八王子市史 資料編5 近現代1」を刊行し、既に販売も開始している。

ただ、「資料編1 原始・古代」については、編集作業に大変時間がかかり、23年度中で刊行は断念せざるを得ない状況で、第1回市議会定例会に予算執行の繰越し議案を出し、24年度中に刊行するという議決を得た。編集委員会を3月に開催した際に、審議会での刊行計画の変更を議論している時点でその話はなかったではないかという発言も出たが、昨年11月まで審議会でご議論いただいていた時点では、何としてでも23年度中にと原始・古代部会も努力していた。しかし1,000枚以上の図版、写真入りオールカラーということで、思いのほか手間暇がかかり、1月時点で繰越しを決定せざるを得なかった。編集委員会からは、それならば焦らずによりよい内容で刊行してほしいという意見もあり、現在、年内刊行ということで編集作業を継続している。理解願いたい。

さて、1月に市長が交代した。石森孝志市長以下理事者全員が入れ替わったが、本事業は市制施行100周年記念事業という位置付けの10か年事業なので、方針を変えず、市史編さん基本構想に基づいて従来どおり継続することを確認している。現時点では、市長から審議会への諮問の予定が特にないので、今年度は事務局から現状を報告し、委員から自由に意見をいただく形の審議会になると思う。よろしく願いたい。

最後に、今年度最初の審議会なので、4月から新たに編さん室に着任した職員を紹介する。後ほど資料で説明するが、今日出席の3名を紹介する。

(齋藤主幹、秋山主査、尾崎主任を紹介し、各職員があいさつ)

【松尾会長】それでは、本題に入る。昨年度、ちょうどこの日に辞令をもらい、11月の答申まで、特に刊行スケジュール、原始から近世までの通史の部分が、28年度完了は動かさなかったが、その内部の微調整をした。また、編さん室の充実ということも議論したが、

それがこういう形で、人事でも反映されてよかったと思っている。

今回は、28年度の市制100年までの期間が限られている中で計画をどのように進めていくかが、この審議会としても大変重要になる。忌憚のない意見をいただきながら、審議会としての責務を果たしていくことになると思う。よろしくをお願いしたい。

1. 平成23年度事業実績及び24年度事業実施予定について

【松尾会長】齋藤主幹から、資料に基づいて説明を。

【齋藤主幹】議題1、平成23年度事業実績及び24年度事業実施予定について。資料に沿って説明する。

まず、市史編さん室の体制だが、体制に一部変更があった。資料1で、特に変更のあった部分は、下段の市史編さん室の職員だ。4月1日付で主査職を1名、編集担当職員を1名、計2名増員した。今後5年間、本格的な刊行に入るが、この新体制で執務する。

引き続き、資料2、刊行物の販売状況等について報告する。始めに、一番上の横向きを表だが、刊行物の販売状況である。市政資料室、南口総合事務所、郷土資料館、編さん室、編さん室（郵送分）ここまでが刊行物を常時販売している場所だ。恩方事務所は、通常刊行物の販売を行っていないが、「恩方の民俗」は特に市史編さん室から依頼をして、販売してもらっている。いちょう塾、市長と語るについては、出張販売の実績だ。

「新八王子市史 資料編5 近現代1」は1,500部印刷し、7月末時点までで110冊売れた。売れ行きは順調だ。パブリシティ等の効果も出ていると考えている。その裏面に、郵送料等も含めた一覧を添付した。次のページには、無償配付先の一覧を添付した。その裏面からがパブリシティの関係だ。ここで刊行が続いた関係で、積極的に新聞記者等に情報を流し、4月以降、記事としては大きく扱ってもらっている。近現代はこの新聞記事以外にも、八王子テレメディアでも取り上げてもらった。「市史編さん 刊行物のご案内」と書いてある最後の1枚が、私どもで作ったチラシだ。事務所、市民センター、図書館、あるいは出張販売やイベントの際等に配布をして、販売促進をしている。

続いて、資料3、平成24年度の編集・刊行スケジュールだ。年度をまたがる事業もある関係で、25年度分までを載せた。まずは、「資料編1 原始古代」。室長のあいさつでも触れたが、秋の刊行に向けて順次編集を進めている。写真データ等は既に入稿済みで、残った原稿部分も、入稿前の最終段階というところまで来ている。次の「資料編3 近世1」は、一部の原稿を既に出稿済みで、順調に進んでいる。民俗部会だが、恩方に続く2冊目の調査報告書「由木の民俗」を、今年度末を目指して現在原稿執筆中だ。また市史叢書2として「聞き書き 八王子織物」、まだ仮称だが、今年度発行に向けて、現在、聞き書き等を進めている。「八王子市史研究」第3号は、既に各部会の皆様に執筆をお願いして、現在、執筆をしてもらっている。下段の25年度部分だが、自然編は2か年にまたがる事業ということで、現在、各専門分野の方に執筆をお願いしている。「資料編2 中世」は、現在、資料選択・筆耕等を順次進めている。「資料編6 近現代2」は、現在、資料選択等を進めて

いる。先ほど紹介した「由木の民俗」の次は「浅川の民俗」ということで、「由木の民俗」の編集と重なる形で浅川の聞き取り調査に入っていく予定だ。

資料4は、「新八王子市史」資料編について、原始・古代と近世の目次章立て案を配付した。原始・古代は、まだ微調整はあろうかと思うが確定版に近いものだ。近世については、まだ作業途中で今後詳細を詰めるので、まだ変更部分はあると思う。今現在での章立て・目次案ということでお示した。

議題1について、説明は以上だ。

【松尾会長】資料が幾つかにわたっているので、資料の順番で。

最初に資料1。市史編さん事業の組織体制ということで、編さん室の職員の増員等の話があった。何か質問なり、意見があれば。

【小此木委員】増員が認められたのは、審議会の意見が大きく影響したと考えてよいか。

【木内室長】もちろん。諸要因はあるが、審議会からの11月答申、またその前段の第1期審議会答申でも体制の充実については触れてもらっていて、理事者にも伝わっている。今回、事務方で増員要求をした場合にも、その辺は十分理解が得られたと思っている。

【松尾会長】事務局で努力したことも事実だが、審議会でも安易に期限を延ばすのではなく、28年を目標にしっかりやろうと。答申の中にももちろんそれを含んでおり、それを踏まえて増員してもらえたのではないか。これは大変歓迎すべきというか、市当局も協力してくれているとはっきりわかって安心できると思う。専門員は増員というか、変更はないか。長期間にわたると異動なども出てくるのではないか。意外にここも大変な、第一線で働く人たちなので、心配なところでもある。

【齋藤主幹】今年度当初の段階では、専門員は増員等はない。昨年度と同じ体制だ。

【松尾会長】よろしいか。

(はい)

【松尾会長】次に資料2、市史の刊行物の販売状況。率直な意見を。

【小此木委員】「資料編5 近現代1」が、この短期間にかかわらず、有償で110冊売れている。いい意味でびっくりしている。販売の場所が、ほとんどが市役所関係の窓口、郷土資料館、そういったところで販売ということだが、今後、PRのために考えると、例えば普通の書店に並ぶということが考えられているかどうか。

【齋藤主幹】書店での販売は従前から課題になっており、私どもとしては、今年度中に実現したいと考えている。

【小此木委員】具体的にどこでというのは、まだなのか。

【齋藤主幹】通常の刊行物と違って、例えば定価等を印刷してないとか、書店で扱ってもらうためには課題を幾つかクリアしなければならない。最初はどこか特定の書店ということになるかもしれないが、多くの場所で買えるよう、順次拡大していきたいと考えている。

【相原副会長】毎年1月ぐらいに、立川で郷土誌フェアをやる。期間限定だが、そういうところにも出版物を出してもらえれば、広く知れ渡るのではないか。

【齋藤主幹】郷土誌フェアには、うちでも出したいと思っている。

【松尾会長】各市町村が刊行物を持って行って並べている。大きな袋を持って行って、次から次へと買っている人もいる。

【木内室長】郷土誌フェアは、23年度も文化財課（郷土資料館）で出したとき、「八王子市史研究」も置いてもらった。チラシ等はいろんな機会に配りたい。恩方在住の他所管職員が、地元のお祭りでチラシを配った例もあり、少しでもチャンスがあればPRをしていきたい。

あと、日本史関係あるいは民俗関係の学会誌に、書評や紹介を載せてもらうという働きかけもしている。実際に掲載されれば、市外からも引き合いがあると期待している。

【光石委員】十分承知と思うが、史書、専門誌は、マージンが必ず要る。それが一つ。

それから、もう一つには、スリップに定価を入れるというのが非常に簡便なやり方だ。書店と相談していい方法をとらないといけないと思うが、本に定価を刷り込まなくても売ることができる。スリップを作るのは、多分依頼する側だ。書店のマージンは、大体単行本だと、今7割5分ぐらい。今の単価はかなり安いと思うが、それで2割5分取られるので、その辺も十分考えて、書店と交渉しないといけないと思う。

もう一つは、かつて教科書類は個別の書店ではなく、協同組合的な、書店が出資している教科書販売の組織があった。今もあるかどうかはわからない。その辺は、どちらかの書店ときちんと話をすればいいと思う。市の仕事だから、例えば何々書店と一方的にやってしまわない方が、受ける方は受け入れやすいのでは。そういう点も考慮した方がよい。

【齋藤主幹】書店組合の存在は、我々も承知している。以前ほど加入書店が多くはなく、書店組合自体の機能が一昔前とは変わってきているという情報を得ている。個別の書店と交渉するのがよいか、書店組合に話せば多くの書店に卸してもらえるのか、その辺は話をする中で進めていきたい。いずれにせよ、お金の問題以上に、多くの市民が手にとりやすい市史ということも考えなければいけないと思っている。できれば多くの場所で市史を販売してもらえる状況を作りたい。マージン等も公のものということで、一般のものより少し安くしてもらえらるなら、その辺も積極的に交渉していきたいと思っている。

【光石委員】交渉したほうがいいと思う。言いなりになると、かなり今はきつい。それと、書店は今本当に変わってきていて、私がやったころとは全く違うと思う。図書館とも十分相談を。卸していくというのは結構大変だ。例えば、本店に持ち込んで配ってもらうのか、あるいは個々に配らなければいけないのかという、そういう細かいことも。集金の問題もあるので、きちんとやっておかないと。行政は素人なので、後であつと思うことがある。市民にたくさん利用してもらうという意味では、いろんな書店に置いてもらった方がいいと思う。最近の事情には詳しくないが、いろいろある。

【池上委員】市外の方への販売というのは、どんな感じか。編さん室（郵送分）が、「八王子市史研究」創刊号はずば抜けて多いが、市外の方の購入が多いのかどうか。

【齋藤主幹】手元にこの126の郵送分の市外・市内の内訳等のデータを持っていないので

詳しく答えられないが、確かに昨年度当初に出した「市史研究」創刊号に比べると、その後出したものについては、少し有償分が減ってきている。私どもでも、創刊号の郵送分については、改めて精査をしたい。

【池上委員】郵送分は、ほかには非常に少ないので、逆に市外の方の購入が余りないのかなと推測できる。これから刊行物が増えていけば、またその後のところ、先に出た本についても、市外の需要が増えてくるかと思う。特に中世だと、割といろんな地域の方が購入することが多いので、市外の方に買ってもらうという方法、どこかで、先ほど書評の話があったが、市外の方に情報が届くような方法を考えてみたらいいかと思う。

【齋藤主幹】近現代は、資料のとおり新聞記事は多摩版でかなり大きく扱ってもらえたので、電話等での問い合わせは他市町村の方からもあった。本の重さもあって、多少郵送料もかかるので、駅に近い場所だったらどこで買えるかという問い合わせが多い。八王子駅の南口総合事務所まで出てきて買っているということもあるかもしれない。歴史に興味のある方は、市外にも多いので、市外の方にもPRできるような手段を、我々も一生懸命とっていききたいと思う。

【松尾会長】資料には、新聞記事なども東京新聞とか読売新聞、さらに広報はちおうじなどがある。こういうものをもっと積極的に載せてもらうようにするといいいのでは。学会の雑誌などでも、「地方史研究」などは必ず新刊紹介という欄に載せてくれる。編集委員や何かの方が書いたりするとすぐ載せてくれるし、そういうのを活用すると全国の人が見て、購入希望がかなり来るのではないか。また、大会等の場所で販売することもできるが、交通費がかかるので、パンフレットだけでも事務局に送って会場に置いてもらうようなこともできるかと思う。また、お気づきの点があれば、よろしく。

次に、資料3の平成24年度編集・刊行スケジュールについて。

「資料編1 原始・古代」は少しずれ込んで来てしまっているということだが、それ以外のところは、頑張っているのかなという感じがするが。

では、資料4、「新八王子市史 資料編」の章立て・目次案だ。4ページまでが原始・古代。最後の部分は資料編の近世1の章立て・目次案だ。いかがか。

原始・古代は、全体のページ数はどのぐらいになるのか。予定としては。

【木内室長】600ページ台になるかと。ただオールカラーなので、紙の種類が違う。近現代よりは1ページが厚い。

【松尾会長】近現代が1,000ページ近い。九百六、七十だが、原始・古代はアート紙や何かで多少厚くなると。全体としては、近現代に近くなってくるか。

【木内室長】それで大判になるので。

【松尾会長】では、またこれも、後ほどでも結構なので、意見を賜りたい。

これまでのところで、何か言い忘れたということがあれば、どうぞ。

【前田委員】事務局から、市史が新しく刊行されたとアピールするために学会誌などに書評を依頼するということがあったが、これはどんどん毎年のように出る。そうすると、1冊

ずつ書評をお願いするという形になるのか。出ることに取り上げてもらうのは、学会誌や何かではすごく厳しいと思うが、その辺はどういう考えか。

【木内室長】出る都度、その時代とか、専門分野に関わるころをお願いする。確かに、年に2冊、3冊出す年もあるので、1冊ずつ依頼すると逆に載りにくいということもあるかもしれないが、その辺は、随時相談をしながらと思っている。例えば、原始・古代などと、中身は考古学、遺跡紹介なので、考古系の学会誌とか、専門誌とか、そういうところをターゲットをお願いするとか、出す分野ごとに検討していきたい。逆に、例えば前田委員には近現代部会もやってもらっているが、近現代だったらこういうところに載せるといいのでは、という提案などもいただければ、大変ありがたい。

【松尾会長】なかなか書評となると、大変は大変だ。1冊だけの書評ではなくて、近現代なら近現代で全部合わせてやるとか、その方が効果的な面もある。ただ、雑誌によっては、「地方史研究」などは、書評というよりは新刊案内みたいな、原稿用紙にすると、ほんの2、3枚ぐらいのものだ。そういうものを重ねてもらおうと、割と1冊ずつ、単発でも載っていく。やはり編集委員会などで、それぞれの分野の方は自身が知っている雑誌等に、だれかに頼んで書いてもらうとか、お互い様でやっていくのが一番いいかもしれない。書評は頼むのが難しいが、内部に知り合いがいたりすると、特に新刊案内だと載りやすいかもしれない。その辺は、編集委員会委員にも努力してもらおうということで。

それでは、1のところはよろしいか。

(はい)

2. 平成23年度刊行物についての意見交換

【松尾会長】では、2番目の平成23年度刊行物について。事務局から最初に何かあるか。

【齋藤主幹】いよいよ市史編さんも刊行が本格化してきたので、この機会に、ぜひ意見をいただき、今後の刊行物に生かしていきたいと思っている。

今回は特に、市史叢書の第1号の「村明細帳集成」、民俗調査報告書の第1号となる「八王子西部地域 恩方の民俗」、それから「新八王子市史」全14巻のトップバッターとして刊行された、「資料編5 近現代1」、この3冊について、それぞれ本ごとに装丁と内容というところに分けて、それぞれ感想、意見をいただけたらと思う。また、本を編集する際に尽力いただいた方もいらっしゃるの、そういう話も聞かせていただけたらと思う。

【松尾会長】これが最初の「村明細帳集成」、ソフトカバーになっている。これを見て何かお気づきの意見があれば。最初だから注目されたのでは。ただ、出たときに私が思ったのは、八王子は、市の中のいわゆる近世の村の数は、ほかに比べたら圧倒的に多い。村明細帳というのは、どこまで残っていて、どれだけ載っているのかというのは、非常にそのところが心配というか、気になったりしたが、苦労しながら載せたのだなという感じがした。

【沼委員】確か前に出た「八王子市史附編」に村明細帳が載っていたが、あれとどうい

ふうに違うのか。

【光石委員】ちょっと関わったので、私からお話ししたほうがいいと思う。村明細帳は収録したもののうち64点は旧市史付編からの再録だ。そのいきさつは全部、凡例の中に出ている。解説でもそういういきさつが書かれている。ただ95点あり、3分の1は旧市史付編以外のものだ。はっきり言うと、付編が出て大分年数がたち、その間、沼委員も関係した「千人同心史」以来、郷土資料館が嘗々と調査して収集してきた村明細帳を載せているものが、30点以上ある。

その中で、10点にはちょっと足りなかったと思うが、専門調査員たちがいるんなところから収集した。大学関係、江戸東京博、本当にあちこちに分散している。八王子市は広域だから、残された資料というのは莫大なものがある。

ただ、私が余りはっきり申し上げるといけないのかなと思って悩んでいるのは、旧市史を編さんしたときに活用した資料が、かなり散逸している。これは今回の市史編さんに携わったものとして、非常につらいものがある。昭和30~40年代は、時代がそういう時代だったから仕方がないもので、今さら言ってもしょうがないが、はっきり言うと、旧市史付編に載せているものの大半の資料が確認できないと言っていいと思う。事実を申し上げるしかないが、校正をしようと思って、現物に当たりたいので、確認をお願いしたり、あるいは、郷土資料館の方を繰ってみたが、失われている。だから、旧市史付編に載せられていたものを校正する段階で、非常に困った。

資料編というのは、校正で100%確認作業をしないとイケないもので、作成に携わったものとしては言いかねていたが、それはご承知おきいただきたいと思う。はっきり申し上げると、編集後にいろんな問題で凡例等のそごがあるではないかと。一般的な執筆者と解説者との統一がとれていない。そのことは議題に上がっていた。それは、まさにそういうことだ。それ以上は私も把握しかねている。

【沼委員】旧市史の初版は非常に誤植が多い。それが付編のほうにも及んでいるのかどうか不安だったので、つい最近、私は、旧市史の再版を入手した。付編の方は、初版と同じように誤植が多いのかどうかということなのだが。

【光石委員】それは確認しようがないと申し上げるしかない。旧市史編さん後にどういう処置がなされたかは、もう我々としては把握しようがない。むしろ、沼委員にお聞きするほうが早いかなと思って、でも、お聞きしにくい話だと思って、今に至っている。

今回使ったのは再版の方だ。ただ、それを確認するすが、既に失われている。これは、追跡調査をしたのだが、あるところでやめざるを得ないというか、もうそれ以上進展できない。昭和40年以前、43年が旧市史の初版が出た年代前後で、昭和40年以前というのは、資料に対する扱い方というのが、今と全く違う。こういう言い方しかできないので、非常に申しわけない。我々が、この新市史に当たる時点では、もう既に散逸している部分が、特に村明細帳については多い。それ以外のものについてはどうかというのは、もうこれからの問題なので、余り申し上げることはない。ただ、幸い村明細帳は旧市史で、かなりの

点数を取り上げていたので、今回生かされている。こういういきさつだ。

【松尾会長】村明細帳は、近世の調査では真っ先にコピーしたり、筆写するもので、それだけ貴重だから、最初の段階で入れたりしたのだろうが、その後、移動が出てしまったということだろうか。今回の市史でそれをフォローしたのだろうが、原本がなくなってしまったものもあるということになるかもしれない。ただ、そういう課題はあるものの、旧市史には載せられなかったものがここで新たに追加されているわけだ。やはり旧市史は多摩地域で最初に着手しており、自治体史として大きな課題があったものを改めてここで私たちがもっといいものを作っていく。ぜひそれに期待していきたいと思う。

沼委員は近代の町村事務報告書なども扱われているが、あれが村明細帳と同じように、真っ先に目をつけるものだ。ただ、ああいうものを集めるのはよいが、ほかの文書等から抜いてしまって、そこだけ単独で使ってしまうと今のような問題が出てくる。

では、ほかはどうか。「恩方の民俗」、「新八王子市史」、何か意見があれば。「恩方の民俗」は、なかなか売れ行きがいい。民俗はファンが多いのでは。編集委員会でも、「新八王子市史」についてもいろいろ議論になったが、審議会でも意見があれば。

【相原副会長】民俗だが、既刊では恩方、来年は浅川ということだが、全体構想として、どこの地域がどの年度に刊行されるか、スケジュールはあるのか。

【齋藤主幹】24年度は由木の民俗、25年度は浅川の民俗で予定している。おおむね1年に1冊ずつという予定で、26年度に加住、27年度に旧市街地を予定をしている。最終年度の28年度はそれらの資料も活用して「新八王子市史 民俗編」という形で最終的にはまとめていく、現在はそのような構想を描いている。

【相原副会長】市民の目からすると、自分たちの住んでいるところはいつ出るのかと。出なかったらどうなのかという部分があると思う。旧村の合併した地域を漏れなく刊行できる形にした方がよいのでは。資料があれば、時間的にそれが許されるなら、そうしていった方がよいのではないかと思う。

【松尾会長】今、大事な問題を提起してもらった。

【相原副会長】例えば、恩方が出たら、川口は出るだろうと思う、川口に住んでいる方は、でも、出ないのかなという疑問が出てくると、いろいろ釈明をしないといけない。

【木内室長】10か年の全体計画の中で、なおかつ少し調査が進んでから刊行を始めているので、最終年の28年度、その前年度まで5冊であれば出せるかなと。余り地域に偏りが出ないように、山間部、丘陵部、中心市街地と、場所も西や東に偏ることがないように、恩方、由木、浅川、加住、中心市街地という計画にはなっている。時間的な制約もあるので、それ以外の地域についてこの計画期間中に出すのは無理だと思う。ただ、当然、出なかった地域の方からは、ぜひこの地域も出してほしいという声は高まると思うので、どれだけ地域の中、市民の中で、そういう声が具体的に上がってくるかを見ながら、ポスト編さん事業として位置付けられるかどうかということになるかと思う。

【相原副会長】関連で、例えば「資料編 近現代1」が出たが、それは全体が何冊でその

中のこれだとわかる。これは第1集と出ているが、第何集まであるのかというのは特に出ていない。未定であるということか。

【木内室長】そうだ。構想上は第5集までだが、第5集が出る翌年に民俗編本編を出さなければいけないということもあり、具体的に作業量としてそれが可能かどうかということで、確実に5集までと言い切れる状態ではない。確かに買った方の、次はどこが出るのかという関心は高い。それはおっしゃるとおりだ。

【前田委員】例えば川口の方が、川口は第何集かと質問したら、どう答えるのか。

【木内室長】先ほどのように答えざるを得ない。非常に心苦しいが、できないものをぜひやりたいというわけにはいかない。一応、この計画の中では、ということで。

【松尾会長】今の前田委員の質問は、この審議会、編集委員会の先の宿題として出てくるかもしれない。私は、こういう叢書とか、ソフトカバーのものが出来るようになって、本当によかったと思う。当初、刊行年度を議論したが、それはハードカバーのもの、通史編と資料編のことで、これだけでも精いっぱいだ。

八王子は、ほかの多摩地域の市町村に比べたら、数倍の規模だ。村の数の平均から言えば10倍とっていいくらいかと思う。それを全部網羅するのは、28年までではできない。ならば、こういうソフトカバーの形で、順次できるところから出していくと。そうすると、どうしても漏れは出る。計画期間の中では、予算的にも労力的にもできない。それをどうしていくかというのは、恐らくこの審議会が、今後、八王子市の将来を考えて、皆さんの英知を合わせて、どうするかと。それを市長なりに提案していくということが、最終的な私たちの責任になっていくと思う。そこまではしっかり議論して頑張るといことになるかもしれない。

【相原委員】市民の立場からすると、地名でとらえていく部分が非常に多い。その中に自分が住んでいるところが入っていないとなると、そこでフラストレーションが出てくるのではないかと。だから、西部地域なら西部地域でいいが、西部地域の中に、恩方プラス、例えば川口というエリアを含めてやれば、そういったことは解消できるのではないかと。

【松尾会長】ある程度、地域をにらみながら。

【相原委員】ところが、最初に出たのが恩方と。次はどこだろうということになると、地名で判断する。川口か、由木か、由井か、横山か。そこに入ってこない、フラストレーションが出てくるのではないか。旧市内は旧市内で、どこの町が出なくても、一つのリンクがされているからいいが、周辺の村の場合は、その村そのものが存立の要件になる。それは意識の中ではまだ残っている。八王子には合併されたけど、恩方は恩方なのだという意識は非常に強いものがある。その辺は、編さんする側の配慮が必要ではないかと思う。

【松尾会長】編集委員長と相談しながら、そういう配慮をすることは必要かもしれない。

【内田委員】「資料編 近現代1」だが、資料等も私などが見ると、非常に今までのものと比べるとわかりやすいと感じて読ませてもらった。例えば、今、京王線の駅と八王子の駅間の東京都の繊維工業試験場とか、その辺も、織物組合が土地を寄附したということが

記載されているし、商工会議所や行政も、今、都へ要望を出す段階で、こういうものにもそういう資料が入っているということは、非常にやりやすくなったというのが一つ。

あと、私はたまたま浅川の出なので、地下壕の工場についても興味深く読んだ。小さいころ中に入って遊んだ場所があって、今考えると、危なかったなと思うが、そんなことも書いてあり、非常にわかりやすいなという感想を持っている。

【沼委員】初めての八王子市史の近現代の資料集が出た。これはすばらしいことだ。今までなかったのだから。旧市史は通史だけで、資料集はない。今、ここで資料集を出しておかなければ、どこかへ散逸してしまう。そういう意味で、ここではもっとまとめたい。今度の場合は、公文書の刊行で、この次が私文書になるわけだが、公文書がまとめられたということを私は大変すばらしいと思う。

では、すべてがすばらしいのか。私はそうは感じなかった。なぜか。まず解説が少ない。今、他の委員が理解したと。理解ができたということは、自分の生活に直結しているから理解できる。だが、明治のところは、もう少し詳しく解説することが必要だと私は感じた。資料をもう少し選択して少なくする。ページ数を増やすことができないなら減らさざるを得ない。それがまず第1点。

もう少し中に入ると、例えば明治後期の村というところを見た。私が一番関心を持っているところの内容を見たわけだが、第1節は「明治後期の村政」、それと一つは、地方改良運動。その地方改良運動の展開を見ていって、「明治後期の村」が第1項に出た。そして、第2項で「神社合祀」、第3項で部落が持っている財産、入会の問題が出てくる。そして第4項で「地方改良」という言葉が出てくる。地方改良運動は、まず神社を合祀する。それから、入会などの村有財産を集めていく。それと、あとは地方改良、そして村政の中の問題であろうと。これでまとめているわけだ。大正時代に入ってくると、学校の統合の問題が入ってくる。学校統合、これは明治末に方々の村で学校統合問題が起こってくる。なぜ統合しなければいけないのかというと、統合で村費の軽減を図っているということだ。これが学校統合の問題。その場合、本校とあとはみんな分校にしてしまうということだ。だから、低学年の場合には分校に通学し、高学年になったら本校に行く。本校に行く場合には、1里も1里半もかけて行くわけだ。

学校の統合の問題は、一般的に地方改良運動の中には入っているのだが、資料編では地方改良に入れなくて、大正の初めの学校統合問題として扱っているが、地方改良運動の一環として扱った方がベターではないかと私は思っている。

理解させるというのは非常に難しい。「恩方の民俗」も、民俗の問題をありのままわかりやすく書いてある。この民俗は、大変よくできていると思う。まさに、ありのままわかりやすくできている。近現代の担当者も多分、基本的には、ありのままわかりやすくということでもってやっているのだけれども、理解させるようにするには、なかなか難しいと思う。

まだ幾つか問題点がある。資料の選択がこれでいいのかどうかという問題点。私は災害

に関心を持っているのだが、その災害を見てみると、関東大震災、何と、それがたった 10 行で 1 項目を設けている。多分これしか資料がないということをあえて言うために、そこに載せたのかと理解した。

資料集の中には南多摩郡の伝染病の患者の数が出ている。伝染病患者、これが大正時代、一体どうだったか。その前に、明治を扱うべきだと思う。南多摩郡の伝染病の患者数を調べたら、南多摩郡全体で、赤痢とかいろいろな問題があった。明治 30 年の赤痢は大変なものだ。私が調べている津久井では 500 名くらい死んでいる。八王子の場合はどうかというと、川口村 1 村で 96 人死んでいる。大正時代は南多摩郡全体で 25 人。川口村だけではない。その次の資料を私はずっと見たが、何しろ避病院をつくらなければいけない、寺を避病院にして、そこにいるような状態が展開している。みんなあたふたしている。これが川口村だけではなくて、確か横山、恩方でも、そういう状況だ。だから、ここで大正時代だけを上げるのではなくて、むしろ私は明治の災害の中で取り上げる必要があると思う。明治 43 年の台風、水害を挙げているが、それと同じように、そこで取り上げなければいけないのではないのかと。

【松尾会長】貴重な意見、ありがとうございます。発言は議事録という形にもなるし、編集委員会にもそれが回っていくことになる。私たちの中には、編集委員を兼ねた委員もいる。資料編ももう 1 冊出るわけだから、そちらのほうで、まだいろいろ可能になる。

【沼委員】そういう意味で、次に期待しているということだ。

【相原副会長】これを逐一見ると、あれも出ていない、これも足りないというほうが非常に多い。それは、やはり収集した資料の中で、取捨選択してまとめたということがあるのではないかと思う。我々が知っている範囲と事務局の範囲とは、ちょっと落差があると。

例えば、具体的には、戸長文書、明治 10 年代の資料がほとんど入っていない。教育関係等は、3 新法のスタート以降、明治 22 年までのわずか十二、三年間のことだが、戸長文書がほとんど入っていない。

それから、教育の部分では、いきなり旧市街地以外の村の文書が入っている。しかし、沼委員がやられた第二小学校の百二十年史には多賀学校の設立の文書があるはずだが、それも入っていない。高等教育では、いきなり府立二中問題だ。確かに、非常に大きい問題だが、ほかにいろいろある。尋常高等小学校、尋常小学校、それから、高等教育でいうと第四高女、商業学校、八王子織染学校、そういう文書の関係がほとんどない。

降って昭和 10 年代、国民学校令が昭和 16 年に施行されて、それまでの尋常小学校は全部、国民学校になる。この国民学校に関する資料が全然入っていないで、いきなり戦時体制の部分が出てくる。その間の部分が抜けているのは、資料的には不完全ではないかと。

そのように見ると、近現代 2 がどういう項目で設定されていくのかわからないが、近現代 2 を刊行する段階で、先ほど沼委員が言われた欠落部分を何かの形で補充することを考えてもいいのではないかなと。これは前回の編集委員会でも、私は言ったが、限られた文書といえども、将来に残す資料というのは、やはり残していかななくてはしょうがない。そ

の補完する部分を2の中で収録していくことも検討する必要があるのではないかと思う。

【松尾会長】ほかにどうか、今まで発言していない方で。

【光石委員】私は専門外で、お二人は生え抜きの方なので、やはり近現代に対する要求力がものすごく高いと思う。それを踏まえた上で、私も自分自身のわかる範囲でいうと、近世から近現代への移行期というのは、確かに戸長役場ができるまでは、役場というものがなくて旧名主だが、名主は戸長と名前がすぐ変わり、名主イコール戸長のような状態の中で、資料が結構残されてはいる。だから、その辺を少し精査してもらえれば、目録はもう既にでき上がっているの、専門家がみれば、これは大事だと多分ひっかかってきたのではないかと思う。どういう内容になるかというのは、決まってからでないといけないので、ちょっとそういうところがある。

もう一つは、蒸し返す意味ではないが、編集委員会で相原委員から明治が薄いではないかと。いわゆる近世から近現代に移行する時期というのは、今、移行期というのは歴史的には光が当てられてきて、そこまでいっている段階だ。それを解明しない限り、現代もわからないのではないかとということ、多分専門家の方々がそういう方に力を注いでいる。そういう時だから、特に八王子市は広域だし多摩の中でも中核都市だから、もう少しどこかで確認作業をする場所、例えばこれはちょっと過剰な要求かもしれないが、事務局の中で、一定のそういうことに精通している方と一緒に、事務局だけでやれるとは思わないので、一緒に項目立ての段階から参加して、少し意見を聞いたらよかったです。今言っては申しわけないが、やはり手薄だと私も思う。目次を読んだだけでも、そう思う。

それと、もう一つ、旧市史で一番足りないものは、近現代だ。明治以降が全く触れられていない。それは戦後の合併問題に端を発しているのだと思うが、ほとんどがそこで頓挫してしまって、合併問題はもう少し後だが、なぜか明治以降がほとんどない。

だから、今回の新市史で、市民の方々、あるいは刊行を待っているいろいろな関係者は、それを一番期待していると思う。私自身もそれを非常に期待して、どういうふうに扱われるかと思っている。資料だけでも、探せばかなりあるはずだ。教育関係などは、もう既に薄い冊子で2冊ぐらい明治以降に既存のものもあるし、旧市内あるいは合併後の、例えば陶鎔小とか百周年の記念史が出されているから、一定の書籍や刊行物は資料として持っているはずだ。そういうものも利用すればいい。

それと、明治26年までは神奈川県所属だから、神奈川県史にかなり書かれているはずだ。八王子からかなり神奈川県史に資料が寄贈されている。神奈川県も、もう少し調査したほうがいいのではないかと。目次を見ていると、明治時代の八王子の中でも旧町の資料が圧倒的に少ないと私も思う。

年代区分というのは、非常にわかりやすいようでもいいのだが、その中でも非常に傑出した事件がある。例えば、3・11の震災以降、八王子はどうか。あるいは、立川断層というのが今、問題になっている。災害問題に市民はかなり神経質になっている。そういうのは自然編で扱うとしても、歴史的な問題は、やはり近現代あるいは近世でやるのがいい

のではないか。ちょっと欲張ったが、この際なので。

【松尾会長】どうもありがとうございました。

【渡辺委員】今、皆さんの意見を聞いていて、私の知識不足のせいかわからないが、ちょっと信じられない。本を出して、外部の方からいろいろ意見をもらう、批判をいただくというのはわかるのだが、内部からこれだけ意見が出てくるということ。それも一つや二つではなくて、これだけ出てくるというのは、一体どういうことなのかと思う。編集委員の方だとか、はっきり言って仲間内からこれだけ異論が出てくるというのは、私は理解できない。会社や外部でいろいろやっていた人間からすると、ちょっと信じられない。ただ、外部に発表して意見をもらうのは、これはいろいろ編集方針や何かがあるからわかるが、何かよくわからない。どういうことが教えていただきたいと思っている。

【相原副会長】別に擁護するわけではないが、市史編さん事業が始まって約半分の時間がたったが、その中で、市史編さん室が今まで収集した資料を中心に、近現代も含めて作った。だから、我々が当然に知っているものと、今回これに携わった編集委員の方との落差があるのは仕方がない。それなりに一生懸命やっていると思うが、個々的に見ると、そういう部分で、欠落部分は出てくる。これはだれがやってもどうしようもない。ただ、それをなるべく押さえていくということは必要だ。限られた時間と人員の中で、一生懸命やったその成果がこういう形になった。ただ、多少知っている方から見ると、ここはまだ抜けているのではないかという程度に感じるのではないかと思う。

【渡辺委員】決して、悪意で皆さんが議論しているわけではなくて、よかれと思ってするのはわかるが。だから、今後もこういう形で、何か再発防止みたいな感じで。

【相原副会長】私が言ったのは、今ちょっと見ただけでも、これだけの欠落部分があるから、それを何とか近現代の第2集の中でフォローできればよいのではないかと思う。その検討はどうかということだったので、問題提起である。

【松尾会長】それは審議会として対応していくと。やれる範囲でということはあるが。

【平塚委員】今、私が一人だけ意見を申し上げないのは、ということで、ちょっと。

実は、この本(「恩方の民俗」)を私も3回ぐらい読ませてもらって、町会で、ちょっと見るよと、こういうふうにしたら、非常にいい反響があった。はっきり言えば、いろいろな産業から、生活習慣だとか、または自治会の組合に入ったとか町会に入ったとか、こういうようなことを細かく書いてある。それを見て、私ももう七十五、六を過ぎているが、我々としては、もう少し遡って歴史を知りたいと感じた。私もこんなことをやった覚えがあるな、こういうことを見たことがあるなというのがほとんどだが。100年という大きな節目の中で、八王子市ということで、今これは西部だが、全体的に網をかけて、こういうものを編集していくということが大切だろうと思う。それには余りにも時間が。十数名のスタッフで、本当にいろいろな資料がなく、聞き込みでやったご苦労は、私も十分、読みながら感じ取っている。今からこれを言っても、もうなかなか難しいと思って話をしなかったが。全体的に、これを10年でするには、八王子を分けて、それぞれの地域の歴史・文化

を本にしていくというのは、今までのような時間のかけ方はちょっと難しいし、先ほども言われたように、ではうちの旧市内の馬乗町とか、そういう話もちょっと入れてもらいたいような、そういうことがあちこちから出ると思うのだが。醍醐辺りから小津という一部を絞った本になっているので、私としては惜しかったなと思って。当然、川口あたりが入ってくればと、そんなことを感じた。

【松尾会長】渡辺委員からの話だが、これはやはり専門的に、しっかりした目を持って研究している人になればなるほど、やはり注文は出てくるのだと思う。今日の記録を編集委員会も参考にしてもらって、資料編は近現代はもう1冊出すので、その中でどうするかということになるかと思う。

煎じ詰めると、やはり資料をどう残してきたかということにかかわってくる。戦災で焼けている場合もあるし、八王子は非常に広く、合併合併で来ているという、そういう難しい問題を抱えている。なかなか編集委員の先生方も大変だったのではないかと思う。

それから、やはり市史編さんが、先の市史編さんと間が空き過ぎてきているという感じがする。今回、100周年ということでやっているが、先ほど話のあった関東大震災などでも、八王子だけではなく、例えば立川とか府中の市史を見ても、全くといっていいほど書いていない。特に近現代に関しては、自治体史はほとんど書いていない。つまり、歴史で記述するまでに至らないというか、自治体史を作る段階では、そこまでなかなかいかなかったのではないか。近世とかは割と書かれていても、近現代になると、部分的な記述になっていると思う。

そういう、ほとんど資料がないような中で、当面、公文書の中から選んで載せていったということだと思う。やはり時間的な問題もあるかと思う。

残されたのは、あと4年間だから、この中で、審議会の先生方も、まさに専門的になればなるほど意見はもらえるわけで、編集委員会の皆さんと一緒にやっていく姿勢を我々も持って、やり続ける以外ない。

同時に、それでもなおかつ危険というのはあるわけで、それを継続事業としてどう考えるか。市の財産というのは、ここでこれをやったら、あとは百何十年になるか、我々は全部生きていないだろうから、そこに行くまでの宿題をしっかりと受け継いでいくことを責務として、この審議会を持っていくと。それだけに、私たちの役割も大きいと思う。

今日はこのぐらいにして、毎回議事録はしっかりとっているし、編集委員会に出席する委員もこの中にいるので、必ず受け継がれていくことになると思う。この辺でよいか。

(はい)

3. 市政モニターへの設問項目について

【松尾会長】3番目の市政モニターへの設問項目について。事務局から説明を。

【齋藤主幹】資料5で説明する。市政モニターへの設問の基本的考え方及び設問項目となっている。まず、市政モニター制度について簡単に。この制度は、市政に関するアンケート

ト調査を通じて、市政を理解してもらうとともに、市民からの意見を今後の市政運営に役立てていくための公募によるモニター制度だ。郵送で行う一般モニターと、Eメールで行うEメールモニターを合わせて100名で構成されている。年3回、6月、9月、12月に調査する。今回は9月の調査で、100名のモニターに市史編さんについて意見を聞く。調査結果は、ホームページとか図書館などで公開される。

続いて、資料1のスケジュールだが、8月下旬までに設問を決定する。9月中旬ぐらいにアンケートを実施、10月下旬ぐらいには、結果が確定、11月下旬ぐらいに市民に公表する。なお、市史編さん室には、公表前に結果をもらえることになっている。

次に、設問項目について。まず、(1)は、市史編さん事業の周知度。市史編さん事業が、今現在どのぐらい市民の方に認知されているかを、設問4つで聞く。(2)歴史・民俗・自然への関心、『新八王子市史』への期待・提案を、3問、設問項目を設定してモニタリングする。(3)市史編さん事業とまちづくりの関係。八王子のまちづくりについて、あなたの考えに一番近いものをお選びくださいということで、ここでも4問ほど質問を設定する。(4)刊行物販売促進のための参考項目。我々が今後、市史刊行物を販売していくための参考になるような質問を4問ほど。(5)と(6)については、資史料の保存と活用について、今後の活用についての意見、それからその他の自由意見ということで、自由記載欄を設けている。

このような形で、今月下旬には設問項目を決定して、今後の参考のためにアンケートを実施していきたい。今日の意見を反映したいと思っているのでよろしく。

【松尾会長】何か質問は。市政モニターは、市史編さん以外でもいろんな形でやっているのではないか。その辺は。

【齋藤主幹】年3回、モニターの期間が2年なので、そのモニターの方が6回の質問に答えることになる。1回ごとに二所管程度が質問して、市史編さんについてというような大枠での質問が年に6テーマほど設定される。最近では、例えば市の広報についてどう思うか、ということを知りたい、行政全般についていろんなことを聞いている。

【松尾会長】今の話も踏まえて、中身の設問項目などでも、意見があれば。

【小此木委員】(4)刊行物販売推進のための参考項目の2で、購入するにあたり、1冊あたりいくらぐらいまでがいいかというような設問項目の趣旨は。原価を割っても、そういう定価をつけていくのなら、この項目は要らないのではないか。

【齋藤主幹】金額の基本路線が出ているにもかかわらずこの設問をすることについて、あえて聞く理由としては、他市の市史でこの厚さ、このボリュームで幾らぐらいということを知っている人にとって、八王子市の価格設定は安いと考えているが、市民感覚としてはどう感じているのかということを知りたいということもある。確かにこれを聞いて、さらに価格を下げるのは、正直に言うと難しい。委員からの指摘も理解できる。

【小此木委員】そうすると、ボリュームや何かを書いておかないと、A4版で、写真がどれぐらいというのを想定しないと、1,000円がいいのか3,000円がいいのかわからない。モ

モニターはアットランダムに応募してきて、多分、知らない人がほとんどだと思う。自分は詳しいからといって返事をくれる人とはちょっと違う。

【松尾会長】そうすると、(4)の2、ここにページ数とか、何かを入れておくと。

【木内室長】ほかの所管の例などで言うと、基本的な情報を別途提供して、それを見ながら答えてもらうことも可能なので、例えばこういう刊行計画で、1冊幾らで、という情報提供した上で答えていただくことは可能だと思う。

【松尾会長】そうしてもらおうとよい。

【木内室長】今日の意見も参考に、最終的には設問項目も精査したい。小此木委員の意見に関しては、1に「購入しない」という選択肢があり、その理由を聞いていない。高過ぎるから買わないのか、買わないで図書館で見るということなのか、場合によっては設問を工夫する必要もあるのかなということを改めて感じる。

【小此木委員】これは1のところ「購入しない」、「わからない」につけた人のみが2に進むようにはなっていない。

【木内室長】その辺も、意見をいろいろお聞きした上で、最終的に調整したい。

【小此木委員】中には、飾りで全冊とにかく買いたいという人がいる。そういう人は安い方がいいし、例えば自分は近世に非常に興味があるから、そこは何が何でも高くても買いたいという人がいる。人によって違うだろうから、非常にこれは難しい。結果だけがひとり歩きをすると危ないという感じがするので、ちょっと工夫した方が。

【前田委員】デジカメが何かで、既刊のもののイメージを出した方が、見る側は助かると。こんなに厚いのかとか、これは薄いとか。叢書と本編の違いがわかるかどうか、ちょっと難しいが。ページ数を書くよりは、いいかもしれないと思う。

【松尾会長】デジカメで撮るかどうかは別として、わかるようにすれば違うかもしれない。

【前田委員】例えば八王子市のホームページ等を見てくださいというのは、多分あるかと。

【木内室長】モニターのほとんどがメールでのやりとりなので、ホームページ等は見てもらえると思う。

【小此木委員】例えば販売場所は既存の公共施設になっているが、若い人などはどちらかというと、インターネットで申し込む人が随分いる。そういう場合に、この項目の中に、その他ということで、インターネットが何かということを示すのかどうか。

【相原副会長】60代以上の人は、こういうを見て、ああ、なるほどということになるが、30代、40代の方は、こんなのは全然関係ない、インターネットだよになってしまう。

【光石委員】ちょっと気になるのですが、送料というのは結構大変だ。送料分をどういう方法で送るかというのは、役所というところは大体かたいので、郵便局の為替で送れ、などという。今、為替だと、えっと感じる。その辺を決めておかないと、多分やりとりが結構大変なのではないか。送料というのは、結構難しいのではないかと思います。

【松尾会長】編集委員会の中でも議論されている。いろいろ議論したことをプラスして、事務局で勘案して作っていただきたい。

4. その他

【松尾会長】最後のその他に入る。

【齋藤主幹】その他報告事項について。まず「広報はちおうじ」8月1日号で市史編さんの特集記事が掲載された。広報の冒頭3ページ、カラーで特集が組まれたので紹介する。

それから、市史編さん職員研修を8月9日に開催した。講師は、近現代部会の梅田定宏委員にお願いし、『大正時代の八王子 - 市制施行から大八王子建設へ - 』ということで、今、中核市を目指す八王子市のまちづくりの参考にしてもらおうと開催した。87名の職員が参加、アンケート結果は集計途中だが、ざっと見た範囲では、職員にとっても非常に勉強になったということで、おおむね期待以上、期待どおりの回答だった。

次に、刊行物アンケートはがきを作成した。今後は、市史編さんで作るすべての刊行物に入れて、読者がどんな感想を持っているか参考にしていきたい。

それと、調査協力者に対するお礼の品の作成。今まで調査協力者に対して特にお礼の品を用意していなかったが、ここで、「ミニ手拭い」と「しおり」をそれぞれ100ずつ作成した。これらの品は、障害者の団体に作成してもらった。この100ずつが終了したら、また品を変えながら同じように障害者団体をお願いして、作成を継続していきたい。

それから、今年度も秋に市民講座を開催する。原始・古代編の刊行時期にあわせて、裏面のほうに詳しいチラシの案内をつけた。

それと、今年度も引き続き、いちょう塾へも講座提供する。自然部会の須田孫七委員、原始・古代部会の関部会長にお願いして、2回、いちょう塾を開催する。

最後に、学生ボランティアの活用とインターンシップの受入。8月末から9月にかけて、東京工科大学の学生11名が資料整理等のボランティアを実施する。11名ということで、ボランティア参加人数が多いので、3期に分けて実施する。また、9月中旬に、早稲田大学の大学院生1名がインターンシップを実施する予定である。報告事項は以上である。

【松尾会長】資料調査に行って、いろんな話を聞いたりするときに、何もない手ぶらよりは、こういうものを出していくと、話が弾んでくるというか、糸口がほぐれるようになって、そういう積み重ねで資料は見せていただけるとか、または、そのお宅になくても、あそこへ行けばあるよなんていう情報をいただく、いいきっかけになる。

それから、市民講座とかいちょう塾の講座とか、これは委員も講演をしてもらったりしている。何か委員のほうで、積極的にこんなこともしてはどうかという提案があってもよいかと思うが、どうか。事務局から何か補足は。

【木内室長】具体的な内容が決定していないので資料には書き込まなかったが、来年1月26日にフォーラムをやることが内定している。前市長のときは「げんきフォーラム」という名前で、毎年テーマを決めて、市長もパネラーになって、いろんな方にパネリストとして来てもらってパネルディスカッションをした。防災、あるいは資源活用についてテーマ

にしたり、いろいろやってきているが、市長が替ったこともあり、今年度どういうやり方をするかということについては、今、検討を進めている最中だ。場所を押さえる必要もあるので、1月26日に市史編さん事業をテーマにやるということで、所管は私どもと、あとフォーラム自体の担当所管である政策審議室の広聴担当と一緒にやっていく相談を始めている。これは、決まったら皆様方にもお知らせする。広報にも載せる。次の審議会等の日程との兼ね合いでお知らせが遅れる可能性もあるので、1月26日の午後2時から4時まで、クリエイトホールでやるということだけ伝えておく。

【松尾会長】こういうフォーラムを企画すると、これも市史編さん事業全体の中で大きな意味を持ってくるのではないかと思う。

この審議会も、昨年は11月ぐらいまでの間で3回ほど開催して答申を作った。今回も、恐らく3回ぐらいのスケジュールになるのではないか。当面、諮問が出ているわけではないが、市史編さんの一番の山場になるので、それに対応した形で、審議会の一定の意見を議事録に残していくなり、また何らかの形で編集委員会をバックアップしていくことを考えていかなければいけないと思う。大体、3回ぐらいのスケジュールになるか。

【木内室長】あと2回程度は予算を確保している。また、皆様方の希望があればということで、例えば類似の事業をやっている最中、あるいはやり終えた自治体など、よそはどうやっているのか話を聞いてみたいとか、編さんが終わったところがその後どのように資料などを活用しているのか見てみたいということがあれば、一応、管外視察用のバスの借り上げも、予算は1回分確保してある。今具体案はないが、ぜひこういうところが見たいとか、あるいはこういうところを知っているという情報があれば、個別にでも事務局に言ってもらえれば、可能な範囲で設定したいと思っている。

【松尾会長】ということだ。第1期のときには、どういう組織を作り、どういうスケジュールでということ、管外視察で神奈川県寒川町の文書館に視察に行って、いろいろお知恵を拝借するというをした。私どもは第2期の審議会だが、基本的に、恐らくこれが中核というか、28年ということだと、今後どういうふうこれを財産として残していくか、これだけの予算と人を集めて、今回職員も増員してやっていくと。これは恐らく、終わってしまえば、もうあとはいつできるかわからないもので、市としてどのように財産にしていくかということも、審議会で意見をまとめておかないと、終わったら終わって、それきりではいけないわけだから、そんなことも考えていかななくてはならない。

では、次回はそんなことも含めて意見をいただく形で進めたいと思う。またお気づきの点があれば、私なり、事務室にお申し出いただきたい。

5．閉会

【松尾会長】時間がオーバーして申し訳ない。これで閉会する。ありがとうございました。

平成 24 年 11 月 5 日

会議録署名人 内 田 純 功